その四

夜

考えて見ると皮肉だ。人一倍淋しがりやの自分が、あれから仙台では、その怖気(おじけ)をふるうような孤独を、いやでも味わなければならなかったのである。経済的に極めて切迫していたためと、それから、ピアノを時もかまわず弾くことや、夜更かしなどの自分の性情とから、どうしても小さくても一軒の家に住まなければならなかった。一軒借りた生活をして見ると、勤め先の仕事と外へ出て飯を食う以外には、他人との交渉がなくなってしまった。

私は堪らないので、暇さえあれば街へ出て街をほっつき回った。そして、夜中になって、家に帰った。暗い座敷の障子を開けると、黴臭い闇の中で、主人公のいない中にのさばっていた貧乏虫共が、バッタバッタと不器用に重い音をさせて逃げ出す音がする。何時もものことで、私が帰って来ると彼等は一時座敷の隅に避難して、そこで翌日になって主人の出掛けるのを待っているのだ。何時か妙に癇癪(かんしゃく)の起って仕方がない夜に、私は蠅叩きで、之等の貧乏虫を皆殺しにして、憂さを晴らした。大小合わせて二十匹ばかりの貧乏虫が、蝦のような白い腹部と足を見せて座敷の隅にひっくり返った。その時、片付けるのを忘れた

ので、次の夜、暗闇でその死骸を足の裏で踏みつぶした。――こんな家に、どうして、早く帰って来る気になるものか。

街を歩いても面白くはなかった。雨も雪も降らない時の仙台の街は、出来そこないのアスファルトの舗装道路に、田舎道のような埃がつもっていた。そこを乗合自動車が通る。市の電車が環状線を作って走っているのであるが、目貫きを通るのは乗合自動車の方であった。それだけに通るバスの数は多い。そういう埃の舞い立つ中を散歩するのは、不快を極めた。広瀬川の淋しい川っぷちへでも行けばいいが、そこまで行くのが厄介だ。途中で自動車の埃を浴びなければならない。それに、私はそういう淋しい所だと、散歩する気にはならなかった。欲しいのは人家が立て込んで、しかも静かな通りだが、それは無理な願いだったろう。

仙台で、典型的な通りと言えば、芭蕉の辻から青葉神社に到る、長い長い真直ぐな国分町通りだろう。東一番町が栄えてからは、国分町が仙台の目貫であった時代は過ぎた。未だ残っている古い家の店だけがずっと続いていて、夜などは、自動車が通る以外は人通りも少なく、街もうす暗く、申し訳のように並んでいる鈴蘭街灯も通る人に寒々とした気持ちを与えるだけだった。こういう静かさは、人の住んでいる所だけにその淋しさが胸にこたえて、北の国の町でなくては感じられない荒涼とした気持ちを抱かせた。荒涼！　私の、とくにこの淋しがりやのわたしの散歩したい気持ちから言えば、求めるところと全く正反対のものではないか。唯一つ、私の気に入った通りがあったが、何となく憚られて、通り難いところであった。それは、××町通りから二三町離れて、それと平行に、一間ぐらいの狭い道ながら、延々として、××町の長さを思わしめるように続いている小路だった。此

処には。自動車は来なかった。静かな上に、人近い臭いがして、私が散歩するにはこれ以上いい通りはないと思われた。しかし、具合の悪い事に、両側は春をひさぐ家で一杯であった。木作りの、洗面所を思わせるような押戸が（おお何という類似だろう！）無数に並んでいる。夜通ると、その押戸のかげから、異様な呟きが、不思議な背骨を撫でるような調子で追いかけて来る。この通りを虚心に散歩出来るだけの勇気は、とても私にはなかった。昼間はというと、その女中のような顔付をした女共が、押戸を一杯に道路へ向って開いて、バケツを置いて拭き掃除をしていた。狭い家の中を外気に曝している家の有様は、まるで夜ひそやかにする腹いせのようであった。子供の頃に煙草で蛙を釣って、悪戯をしたことがあった。被害にあった四五匹の蛙は、慌てて水際へ飛び込んで、並んで口から腹わたをだして水にひやかした。私は、これ等の遊女屋の昼間の様子を見て、あの残忍の犠牲になって苦しんでいる蛙を思い出した。だからこの通りは、昼間もやはり私には平気で通れない通りであった。

こういう、「この通りは」と私に思わせるような小路が、何故売春の家で満ちているのだろう。そぞろ歩きに適したという感じは、この家々の経営者達にも此処がいいと、ピンと来るものがあるのだろうか。兎に角、私にとっては生憎くのことであった。

歩き回って草臥れて寄るところは、先ず喫茶店だが、喫茶店もそれに毛が生えた西洋料理まがいのものも、割合沢山あった。しかし、どれもこれも私の気に入らなかった。そんな点でこの町の趣味は、殆ど東京の模倣でそれが鼻につき、しかもやや奇妙なところがあった。例えば「ローレライ」という店があって、これがフランス料理だ。そうかと思うと、「バルザック」という店が英国風酒場なのだ。そんなのを目にすると、この次には「ロー

マ」とか「ムッソリーニ」とかいった店に、アメリカ料理でもやらせたらどうだと言いたくなるくらいだ。

どの店も、最初は割合感じがいい。まあ、その感じがいいという事を説明するのに、私のような低級な男の心理を容赦なく言えば、女達の理解ありげな笑顔が心に残る、といったような感じのよさである。此処で「理解あり気な」などという、さもしい言葉を、あまり突っ込んで詮索して、嘲笑の種にしないように願いたい。そのような店に、二度三度と行くうちに、実はそれほどでもない、と言う失望に似た気持ちが必ず起こって来るから不思議だ。何故、最初のように、笑顔を抱いて戻る幸福な気持ちにならないのだろう。それを詮議する前に、味気ない気持ちが先だって、其の店が厭になる。他の店に行き出す。そして何処の店も、その点殆ど同じ様な経過をとった。再びここで断る必要もないことだが、ほっつき回る目的から言っても、私は馴染になりたかった。馴染になって、馴染の我儘（わがまま）を言いたかった。それなのに、不思議と馴染になれない。通えば通うほど、馴染になり難くなるような気がして来る。最初の調子のよさは、ほんの一時で、あとは何時までもこの私を他所者にしておくような、意地の悪いものが残る。何故だか判らない。

しかし、これは、この土地の気風と言うのではなく、ことによったら、相手が女の事だから、私と言う一人の男の男性としての印象が問題なのかも知れない。成行きに照らし合わせて見て、それはこうも考えられる。私と言う人間は、一寸見はやや気持ちよく見えるが、見直すと不愉快な奴だと言ったような感じを女性に与える、としたらこの女達の態度について、何のかのと言う事は出来ない。これが私の対女性的運命の特殊性だとして、諦めるより他はない。だけれども承服し兼ねるのは、この町へ来てとくにそういう思いを強

くさせられる、と言うのはどういう意味だろう。この町は、そういう点について、他所よりも一層、教訓的なのだろうか。そして、自惚れやの私は、この町に来たことをその点で、感謝しなければならないのか。

×　×　×

私は出るのが厭になって来た。その後、私はなるべく家にいて、家を寝床と言うよりも、蟄居(ちっきょ)の穴窖(けっこう)と考えるようになった。家にいる間の大部分は下らない本や雑誌を読み、その暇に楽器を鳴らすことと、遠くにいる友人や知己に手紙を書いた。勿論客が来るなどということは殆どない。例の仕事の相棒が、東京へ去ってからは、訪ねて行く先もない。私は、一日中無言で通して、飯を食いに行ってさえも、指を動かして注文をし、手を使って食うだけで、黙ったまますませることが多かった。物を言ってこの町の教訓的な人情にぶっつかるのを怖れたので、止むを得ず、私はおしになったのであった。

しかし、この沈黙の生活を続けてみると、これがまた、時々堪らなく不安なものに思われて来ることがあった。私は隣近所とは殆ど交際しないし、大家へ行くのも稀だったので、付近では私が一体家にいるのかいないのか、家にいる間は何をしているのか、そんなことを知っている人はなかった。近所で判ることといえば楽器の音だが、その楽器さえも、気が向かなければ一週間や十日は手をふれないで放っておくことが、屢々(しばしば)あった。だからもし私の体が、或る朝この閉め切った室の中に、白い眼をむいて冷たくなっていたにしても、二、三日は誰も気がつかないだろう。病気になると、ことにこの不安に、駆り立てられた。そして、このまま参ってしまったら、などと思うともう一刻もじっとしていられない気持ちになって、病気にも構わずそのまま起き上がって、街へ出掛けるのだった。病が悪化し

て、息を引き取るとしたら、この家の中で、孤独の臨終を迎えるよりは、そして、死んでから数日して人々に発見されるよりは、まだ、人々の親切の中で死ねるという点で行き倒れの方がましだった。この為に或るときは、雪の降りしきる中を、風邪をひいて雪が黄色く見えるほど熱のある体を外套につつみながら、夜中まで歩き回ったこともあった。そして身も心もヘトヘトに疲弊しない限り、疲労が不安をねじ伏せるようにならない限り、私の足は家の方に向かなかった。

そういう間歇的な不安の間にはさまって、やや平静な孤独が続いた。私はしきりに本を読んだ。本と言っても、私のような男の読むもののことであるから、極めて雑然と、色々なものを手当たり次第に読むばかりだった。これが、何か一つの大きな体系的なものを、組織的に読んで行くのだったら身にもなったろうが、とりとめのない衝動的な選択でしかし興味本位で読むのだから、読めば読むほど頭の中は、一層雑駁（ざっぱく）になって行くばかりだった。私の読む本とはどんなものか、試みに私の万年床の傍にある貧弱な書架を覗いて見よう。二段目に、端から、「江戸小咄」「猟人日記」「エスペラント」「婦人と犯罪」「漢詩自由自在」「北越雪譜」。その次には、珍しく、ゲッツェン叢書が、五六冊ある。これは面倒くさい独逸語に恐れをなして、殆ど頁を開かれない一群である。その次には、また、前のような調子で、「北極探検」「アル・カポネ」「宇治拾遺物語」「フランス文典」「川柳雑俳集」「ゲーテとの対話抄」「ジャズ入門」といった具合である。上の一段目も、下の三段目も、之と大同小異の集成をして、並んでいる。誰でも、私の頭の中が、どんなに雑然としているか、一見して判るだろう。しかし、これ等の本を読むというだけで、後を言わなかったら、嘘をついた事になる。恥しいけれども本当を言うとしよう。私がその頃、最も耽読（たんどく）し

たのは、これ等の本よりももう、下等な講談や大衆文芸や三文小説だった。座敷の紙屑の間には、週刊の安雑誌が一杯に取り散らかしてある。隣の三畳にも、読み殻の大衆小説類似の本が高く積んである。私の時間潰しは、主にこの思想もなにもない安雑誌や安本の類であったのである。大部分は、きたならしい古物を古本屋から買って来た。その汚れた本や雑誌を次から次へと買って持って来て、私は万年床に転がった。この読み殻の山を今考えると、こんな内容の卑俗なものを、よく飽きもせずあんな風に後から後からと読んだものだと思う。その惰性的熱情には、確かに安物に馴れたアルコール中毒的なものがあった。眼がつぶれそうな安ウイスキーや泡盛に、習慣的に酔っ払っている状態を、そのまま読書にあてはめれば、私の有様が容易に想像がつくだろう。

私が盛に手紙を書き出したのもこの頃であるし、手紙に書けないようなことは、曲りなりに日記体に付け出したのもこの頃だが、このような紙に訴える事を覚えたのに対しても、もしこの時、私に他のインテリに匹敵する程の教養の高さや、魂の深さがあったなら、私は必ずこの孤独を利用して、自分を幾分なりとも芸術的に生かすように努力しただろうと思う。しかし何分にも、私のような読書を何年続けたところで、どの程度の教養が出来るかは極めて疑問であった。また魂の問題も、先ず、お話にならないと言ってよかった。

その頃、或る人が、私に対してこの程度の本は読む必要があると言って挙げてくれた本の名の中に、聖書が入っていた。私は、ふとこの聖書を読む気になって、手頃な古本でも欲しいと思った。それが、或る時この町の盛り場の古本屋で見付かった。新約旧約をまとめたもので、定価は一円二十銭だった。私はそれを見て、高いと思った。何故、何を標準にして高いのか、一寸自分にも言えなかった。過去幾百億の魂を救って来、現在も救いつ

つあるこの本が古本で一円二十銭だ。人は安いと言うかもしれない。しかし、私は買うのを躊躇した。兎に角けちな性分の私は、ただ金の一円二十銭の方ばかりを惜しいと思ったのに違いない。聖書を店の本棚のもとのところにしまい、眼を移して行くと「犯罪手口の研究」という小さい本が眼についた。価は三十銭、私は忽ちこれを買った。こうして、聖書の代りに、刑事の志願者でも携えていそうな本を買って帰るような男が、まあ有体（ありてい）の私である。単なる猟奇に魂の救いを没却するような私に、世界の愛情史が解る筈がなく、結局そういうところから、芸術を云々する資格にも欠けて来るのではないかと思うのだ。

×　×　×

それでも、いっぱし夜の静寂を楽しんで、余り明るくない電灯を、万年床の頭の上へ引っ張って、乱雑と静寂の奇妙な融和のなかで乱読に浸った。好物の鰯（するめ）が私の顎を痛くして、鼻紙や便箋の反古の中に、鰯の食い殻の塩くさい皮や足の切れっ端が散らばった。こんなものの香にさそわれるのか、時々夜の昆虫が訪ねて来た。一番多く騒々しいのは、例の貧乏虫で、彼等には夜の昆虫らしい、ひそやかなところが少しもなかった。武者母衣（むしゃほろ）のように、盛り上がって肥った胴体をしているだけあって、鈍感で愛嬌があった。気の毒にも、時々私の虐殺の対象になって、私の残忍性を中和してくれた。それから名は何と言うか知らないが、光った白い百足とでも言ったような虫が来た事もある。体全体がまるで銀メッキでもしてあるように、白く繊細に光っていて、体つきが百足よりも一層しなやかであった。この虫は、座敷を斜めに横切ってやって来て、紙屑の角を、その角度そのままに、自分のしなやかな体を密着して這わせながら、なめらかに音もなくすべり越えた。そして、私の読書の邪魔をしないように、静かにその辺を散歩しながら何処かへ行ってしまった。

げじげじが稀にやって来た。これは見ていると、ゾッとするような悪感を催す姿態をしていた。しかし、その高いそろった足が、提灯の骨のように繊細に並んでいて、歩き出すとこの脚の中に、組織的な粗密波の運動が次々と頭から尾の方へ伝わって起って、その鉄橋のような奇妙な体が前へ進むのであった。小さいながらも、その恐ろしく整然とした組織的な運動には、一種の荘厳さがあった。小さなのでは、蜘蛛がよくやって来た。これは貧乏虫以上に無遠慮で、読んでいる本の上へ這い上がって来て、まるで読む邪魔でもするように、いそがしく歩き回ったり、私をガリヴァーに見立てて、腕から万年床へ糸を張ったり、私が坐り草臥れた足を投げ出すと、その脛に這い上がって、毛の生えた中を、毛にはじかれながら、無茶苦茶にあわてふためいて、泳ぐように渡ったりとした。その有様が仙台でパチンコと称して大いに流行している一銭玉ころがしの玉が、釘の林の中をツンツンはねて落ちて行く有様に似ていて、私を笑わせた。尤も、蜘蛛と言えば、一度大きなのがやって来た事があった。直径三寸ばかりの円の中へ一杯になりそうな奴だった。何処からやって来たのか、私が不図顔を上げると、座敷の隅に止まっていた。はじめは、電灯の下から不意に移した眼の定まらなかったせいか、畳に大きな穴が出来たように見えた。それが大きな蜘蛛で、じっと息をころして、私の方を窺っているのだと判ると、如何にも暗闇の産物らしい邪悪な感じがして、私の気持ちを騒がすものがあった。私がもっとよく見ようと思って体を起すと、蜘蛛は矢庭に走り出して、まるで空を飛ぶ鳥の大地に落した影のようにすべるように、傍にあった井の蓋と汚れた手拭いの上を、走り越えて畳を横切り、障子に登り、桟を越え、障子の紙にバラバラという無気味な音を残して壁に達すると、たちまち見えなくなってしまった。室に眼張りをした私の心覚えからいうと、そんなところ

に彼の隠れる隙間などはないはずであるが、壁と鴨居の間でふっと消えたようになって、何処へ行ったのか、すぐ電灯を持ち上げてくわしく調べたが判らなかった。

突然ギャーギャー言って騒ぎ出すさかり付きの猫などには、私は思わずカッとした。たとへ、大衆文芸耽読的静寂であろうとも、静寂に没頭している時の神経は非常に敏感で、突然の騒がしい物音を耳にすると、総身肌に粟立つような思いをして、飛び上がるからだった。二、三度この不愉快極まる衝撃を受けたので、私はすっかり腹を立てて、待ち構えていて、縁の下からフーフー言って飛び出した猫をめがけて木刀を振り下ろした。それが、二匹目の猫の背にうまく当って、猫は物も言えないように、その場へへたばった。私は、死んだかと思って身を固くして見下していると、猫はたちまち上半身を躍り上がらせて、前脚で激しく大地を掻いた。後脚が伸びたきりになった。下半身が死んだようなって、死物狂いで地面を引っ掻く前脚だけの努力で、ずるずると引きずられて行った。致命的な重傷を負ったらしいが、彼にとっては悪魔のような存在に見える私に対する恐怖にかられて、必死の努力をして逃げ出した、という風に思えた。

猫が暗闇に消えると、私は身の固くなったのが解けた。残酷なことをした、と言う思いが胸をむかむかさせて、未だ残っている胸の不快な動悸を意識しながら、唾をはいて木刀を放り出した。そのあとで、不図この残虐が、彼等の幸福に対する動物的嫉妬ではなかったか、と思うと、それに対する明快な否定が出て来なくて、激しい自己嫌悪に陥った。

× × ×

五月の末から、六月へかけてこの町でも、非常に暮しいい時節がやってきた。私は自分の勤めが朝遅く出勤してもいいところから、毎晩明方近くまで、起きていて耽読した。

そのうちに、また一つ、私を非常にいらいらさせるものが出来て来た。

十二時近く、この町の終電が物憂い音を立てて通りすぎると、この町は完全に音を消すと言っていいくらいに静かになる。余り静かで、東京に馴れてきた私は、はじめは耳が変になるようだった。このころになってこういう静かな時が来ると、きまって不思議な音が何処からともなく伝わって来るのだった。不思議な音。何と言ったらいいか、電気モーターの唸るような、底力のある持続する音である。それが、一体何処から聴こえて来るのか判らない。壁をつきぬけて来るようでもあるし、大地から這い上がって来るようでもある。遠いかと思ってきくと、二三町先で唸っているようでもある。しかし近いかと思ってきけば、まるで膝の下からでも湧いて来るようにも聴こえるのだ。始終底力のある響を持続させて、まるで耳の壁を押え付け、突っ張るようにして、無理無体に耳の中にはいって来るようだ。この音が鳴り出すと、私は頭蓋骨が重くるしく鳴り響いて、不愉快で堪らなくなる。読書などは到底出来なくなる。私は屢々（しばしば）本を放り出して起き上りながら、あらゆる方角に耳をすまして見るのだが、何処から来るのかさっぱり判らなかった。

× × ×

子供の頃、故郷の町へ怪しげな狐を使う稲荷手品の一行がやって来て、その一座に加わって釜鳴り仙人というのがいた。小さい釜に長い蒸籠（せいろ）のような桶筒を被せて、その上に蓋をして、釜の中には水の中へ生米を入れて、これを七輪の火にかけておいて、気合をかけたり祈ったりしながらこの釜を鳴らすのであった。釜は唸り声を出して鳴った。終いには実に大きな音になって、小屋中ワンワンと鳴り響いた。この釜を鳴らすために仙人は色々な勿体ぶった身振りをした。何故この釜が鳴るかは、成人した未（いま）だに解けないでいるけれ

ども、その音が如何にも蒸籠のような筒に鳴り響くらしい底の知れた音色で、その時、子供心にも余り神秘な業とは思えなかった。こんな経験が子供の頃あった。

今、まるで、その釜鳴りそっくりの音がするのだ。もっともそうワンワンいうのではないけれども、モーターの唸りが太い筒に響いているような、耳を無理やりに押えつけて鳴るところが、そっくりなのだ。大地が釜だとしたら、この夜の外気に、何かこう巨大な蒸籠があって、私はその中にはいっていて、身の回りに釜鳴りがボツボツ始っている。そんな具合なのである。

そんな巨大な神話めいた仮定を一寸して見たことから、こんな風にまで私は想像を逞しゅうした。この音がこうして大気にあると言うのは、地震か何かの天変地異の前兆ではあるまいか。この音が物音のすっかり絶えた瞬間から始まるのは、音がそれほど幽かに小さいからで、四辺が静かになって自分の耳が鋭くなるから聴こえるのだろう。雉が、地震の前触れをよく感知するように、私の耳がその前触れの音に敏感に感ずるのではないだろうか。平常自分の耳のいい事を些か誇っていた私はこんな風に考えて、そこから凶事の予言も出来ないことはない、といった少し気負い立った考えまで起こした。

二、三日、そんな状態が続いて見ると、その予感とか前兆とかいう言葉が、如何にも自分性来の誇大癖らしい馬鹿馬鹿しいものに思われて来た。音は如何にも明瞭に、如何にも身近にきこえて、空や地の底を問題にする程の仰山な事でもなさそうだと判った。

音が何処から来るかを究めることもそうだが、現実的な問題としては、こうして耳を押えつけるように鳴る響き、つまりこれにはどうも共鳴物があるので、こんな風になるらしいが(その時そう、私は思ったのである)、この不快な共鳴を取り除くのが先決問題である。

釜鳴りの音も、案外からくりは生米と釜の底の接触点といった僅かな場所にあって、あの咆哮は、主に蒸籠筒の共鳴にあるのではないだろうか。同じ様に、例えば僅かな音がこの家の土台を伝わって来て、この部屋の何かが共鳴するとしたら――私は部屋の中を見廻して、ピアノに視線をとめた。先ずこれが怪しい。第一ピアノは楽器であるから共鳴のために作られたようなものである。私は早速調べた。後方の響板は壁にくっついていてどうにも調べようがないが、前面の上下の板は手を使って様々に調べた。この板はその音に余り関係はない様だ。念の為に万年床を持ち上げて、二枚の布団でピアノの前を全部くるんで、それを机や椅子で押さえて見た。それでもきこえてくる音に変りはなかった。ピアノではないらしい。兎に角、床かこの家全体かが共鳴しているに違いないような音だが、ピアノが何でもないところを見ると、こんな日本式な家は、尚更関係ないようにも思えた。結局、音源ばかりでなく共鳴の如何さえ捕え難かった。奇怪な音とも何とも言い様がない。

こうして、私はいらいらしながら、夜明けを迎える。東が白んで冷たい空気に霧が下りて来るような夜明けになると、郭公が鳴き始める。すると今迄不快に続いていた音が、ピタと止んでしまうのであった。鶏鳴と共に消え去るなら幽霊であるが、これではまるで、幽霊の屁みたいなものである。

次の夜、また音が鳴り始めると共に私は本を放り出して、その音源をつきとめてやろうと思って、猫の額のような狭い庭へ出た。大家との境の塀の傍に、一本の細い杉の木が生えている。私はその下に立って、夜更けの空気の中で暫く耳をすました。私は庭の三方の隅に、色々と姿勢を変えてしゃがんで見ながら、まるで大地を嗅ぐように耳を傾けて見た。音の変化があるようでもあり、ないようでもある。まるで見当がつかない。元来我々は外

耳の構造の為か、その上そこの皮膚感覚といったようなものが加わっている為か、普通の音であれば、その音源の方向の大体をすぐ知ることが出来る。ところがこの音は一向にそのような方向感覚に訴えて来ない。その源が極めて小さい音で、しかも大地一面から伝わって来るとすれば、どの隅でも等分に近く聞こえるかも知れないから、この音の方向が判らないのは、私にはどうも大地を伝わって来ると考えるより他はなかった。それで庭の色々な隅に踞(しゃが)んで見たのである。

大地から伝わって来る音とすれば何だろう。一定の音高が正しく持続しているのだ。私は前夜この音高を調べて見たが、ピアノの中央のハ音のすぐ上の、嬰ハ音に当たるのが判った。こんな嬰ハ音の持続音を持つもので、大地に響き渡るものと言えば工場のモーターか何かでなければならない。この近所に深夜の夜業をする工場でもあるのだろうか。しかし、もう一度よく考えて見る必要もある。実を言うと、この音が果たして、大地を伝って来るのかどうかも、まだ本当によくは判っていないのだ。

私はふといいことに気がついた。この屋敷の中央に当たるところに共同井戸がある。相当に深い。実際に大地を伝わって来ている音であるならば、この井戸には相当な響きを持って鳴っているに違いない。私は庭を出て共同井戸へ行った。井戸は屋敷の表門からはいって来た道が突当って三方に分かれる、その突当りにある。傍に薄い街灯が一つ立っていて、これがこの屋敷の唯一の街灯なのだ。コンクリートの大きな流し場と、ポンプのついている井戸蓋が、薄暗い光に照らされている。

私は傍へよって、井戸蓋に耳をつけた。幽かに、水の滴るような音が底の方でする。ところがさっきしきりにきこえていた例の嬰ハ音の持続音は、全くきこえない。私は期待外

れに、内心少し驚いて耳を離した。ここで聴こえなければ大地からの音ではない。矢張り空気を伝わって来るのだろうか。夜空を見上げた。静かな夜空に一杯の星が、うるんでいるように低くたれている。じっとそうしていると、確かにあの音が聞こえてくるのだった。空気を伝わって来るならば、方角ぐらいは判りそうなものだ。そして方角の判らない事は、此処でも同じである。自分の耳を信じかねて、もう一度井戸の蓋に耳をつけて、神経を耳に集めた。そうすると確かにきこえないのである。その証拠には、こうして耳をつけていると、音がきこえない時の、こころからホッとした感じがやって来る。私があの音に自分がどんなに悩まされているか、これでも判った。

ふと、後に人の気配がしたので、私はギョッとして振り返った。傍の家の軒陰から、洋服を着た男がよろけながら出て来た。彼は体をおよがせながら、顔だけは出来るだけ真直ぐになるように、私の方へ突き出して近寄って来た。私の家の一軒おいて隣に住んでいる男で、大家の義弟であった。ここの大学の法科を出て、大家の妹を貰って、義兄の借家に住んでいるという。酒好きな男で、私は何時か彼と一緒に、大家で酒を御馳走になった事があった。足元は相当に覚束ない。目付きは大分据わっている。もう夜更けの随分遅い時間なのは、何処かで呑んで来たらしい。彼はよろよろしながら、体を起こしてそり返るようになりながら、暫くの間私を見つめていた。

「水原さんじゃ、ないですか。……どうしたんです？　この夜更けに……」

この夜更けに……は少し本性違わず的である。

「変な音がするんですよ」

「変な音？　ヘンナオト？」

彼はこう言って、フラフラと私に寄り掛かりそうになってきた。私は酒臭い息を避けながら、思わず彼の体を支えた。彼は支えられたまま、私の顔を一寸見て、それから、廻りの暗闇を見廻した。酒で大袈裟になっている顔が、極めて怪訝(けげん)そうである。

「今、してますか？」

「いえ、今はきこえませんがね、毎晩、夜更けになるときこえて来るんですよ。モーターが唸るような音なんですよ。この辺に、夜業をする工場でもありませんか？」

「サア、この辺には、ありませんねえ」

彼は幾分酔いから覚めたようにしゃんとした。私達はしばらく黙って立っていた。不思議に、今は、音がきこえない。

「きこえませんね」

「ええ。今、急に、止んでしまったようです」

彼は頭を一つ振ると、また前のようによろよろした姿勢になって

「失敬します」

と、書生風の言葉つきで言って、暗闇へはいって行った。私は、何となくぼんやりと井戸にもたれて、見送っていた。彼は玄関に着いたらしい。ソッと玄関を叩く音がきこえて来た。

「絹！　おい、絹！」

四辺に、はばかるような声である。家の中はしんとしているらしい。叩く音が段々大きくなってきた。中からは、何の答えもないと見えて、最後に癇癪を起したように激しい音をドシンとさせると、やがてこっちへ戻って来る足音がした。井戸端から帰りかけた私と、

暗いところで出逢った。彼は自分の家の玄関を指しながら、低いつぶれたような笑い声を立てた。暗い中で、そのしかめた笑い声が、嘲笑しているようにも、泣いているような表情にも見えた。私は返答に困って立っていた。玄関がソッと開いた。彼は耳聡くきき付けて向き返ると、何を思ったのか、いきなり私の肩に手を廻した。私は呆気にとられて、この本性違わざる酔っ払いのするままになった。草履をはいた彼の細君の白い寝巻姿が、音もなくぬっと表れた。彼女は大きな女であった。背丈は小さい夫をはるかに凌駕（りょうが）していた。彼女は夫一人でないのを知って、驚いて立止ったらしい。

「おい。今夜はなあ、水原さんに、すっかり御馳走になっちゃったんだあ」

と言った彼は、またさっきの完全な酔っ払いになっていた。私はこの飛んでもない嘘に対して、咄嗟（とっさ）に抗議の言葉が出て来なかった。彼女は私だと判ると、とって付けたような愛想のいい声を出した。

「あーら、そうですか。ほんとに、ご迷惑をおかけしまして」

細君は生粋の仙台人のくせに、こんな東京弁を巧みに使いこなす、お上手者であった。彼は、私から離れて彼女の腕にぶら下がると、仰々しくぐったりとなった。彼は確かに、それ程酔ってはいないと私には判ったので、その酔っ払い振りのうまいのに驚いた。私は、細君のくり返すお礼を後にして別れた。二三間来て振り返ると、細君が玄関から着物でも放り込むようにして、彼の体を入れるのが見えた。閉めた玄関の中から、突然彼の廻らないような舌で言う声が聞こえて来た。

「俺が、俺が、俺の家へ帰るのに……」

「静かになさいッ！」

それっきり静かになってしまった。彼等の家庭の主権の存在する場所や、また、彼の酔っ払い振りの真相をもっと確かめたい気持ちもしたが、独り者の私が彼等夫婦者の態度や心理を色々とさぐったり様々に憶測したりするのは、それこそ愚の骨頂であると思ったので、そのまま自分の家へはいった。例の音は再び聞こえ出した。私はその夜も暁方寝につくまで、これに悩まされた。

× × ×

この怪音に対する、これまでの私の色々な努力が、実に笑うべき無駄な模索と判ったのは、それから二、三日した後であった。

耳にきこえる音は、ますます強く明瞭になってきて、一層不快なウワウワいう強弱の変化をともなって来るようになった。夜だけでなく、昼間もきこえるようになった。何か強い音、例えば街を歩いていて、電車のきしりをきくと、その音と共に光で言うハレーションのような、それに似た刺激が耳に起こり、その後一寸の間であるが、例の嬰ハ音が、首を出すのだった。この不良な残響に似たワンワンいう刺激の不快さは、例えようがなかった。その日、用があって広瀬川の傍を通ったが、その川のせせらぎさえ、まるで金ブラシで神経をこすられるような、どぎつい不快なものにきこえた。これはおかしい。普通ではない。と、このときはじめて自分の耳が変なのではないかと思いついた。そして、耳の奥に熱をもっているようで、肩の凝っていることにも、気がついた。

そう思って注意していると、何か軽い音が聞こえている間は例の音も静まっているが、辺りが非常に静かになると、何処にいてもきこえて来ることが判った。それが遠くで一寸犬が吠えたりすると、すぐ途切れるのであった。指で耳を押えただけでも、音はなくなる

のだった。強い音だと、さっきの飛び上がるような不快さを感じるのだった。

あの真夜中の嬰ハ音が、いよいよ自分の耳鳴りであったと判ると、今迄の自分の行動が、極めて滑稽で馬鹿馬鹿しいものに思えて来た。

汝先ず眼の塵を払え、か。全く幽霊そのものであった。

耳鳴りは、私が、この半月ばかりの間、レシーバーを耳にあてて仕事をした為らしかった。それに夜更かしと暁方から眠る眠り方の、少なくて浅いことにもよったろう。眼や頭がその割に疲れていないので、主人公が気が付かないから、耳だけが悲鳴を挙げたのだった。嬰ハ音の悲鳴などは生易しいようだが、それを放っておいたらそのあとはどうなるだろう、とおもうと楽観できない。私はこれを準神経衰弱と判断して、睡眠を充分とるのが一番いいと思った。充分に眠るためには……そうだ、酒を呑むに限る。私は財布を懐中にして、未だ宵の口の街へ出掛けて行った。これが、怪音に悩まされ始めてから、一週間ばかりした晩だった。

その途中で、バッタリ出逢ったのが大家の義弟である。彼はお礼に一杯奢ると言った。女房には、此の間奢って頂いたから、今夜はそのお返しをした、と言えばいい。と、彼らしいうまい口実を考えていた。彼は若しかするとその時、もうすでに多少呑んでいたのかも知れなかった。私は喜んで彼に従って、彼の知っている支那料理屋へ行って、一緒に呑んだ。

「で、その変な音の正体が、貴方の耳のせいだったんですか。耳を酷使された、と貴方は言いますが、そうかも知れませんね。お仕事もそうでしょうが、此の頃、貴方のピアノの音は猛烈ですねえ。そんなせいもあるかも知れませんよ、きっと、いや、喧しいなんて言

うのではありませんよ、決して。みんな、ピアノの音がきける、と喜んでるんですよ。ですが、此の頃の調子は、どうも変だ、と皆で心配していたんですよ。しかしですねえ、音とは何ぞや、と言う時に、音とは、空気の疎密波なりでは、足りないわけですね。耳鳴りも、また、音なり。成程ね。その幽霊じみた音に対して、貴方が、妖怪味を感じなかったのは、いい事でしたね。妖怪味。これは僕の造語なんですが、つまり、妖怪変化に出会った時の、恐ろしい、という感じですね。僕は、幽霊や人魂に実際に出会ったという人の話をきく時には、その前に先ず、この妖怪味があったか、なかったか、ということを必ず訊くようにしているのです。この妖怪味が本当になかったときは、貴方の場合のように、その話は、まあいわば科学的な記述として、信用してきくんですが、実際は経験者が妖怪感に気押されている場合が多いですね。話半分の信用もおけないのですよ。例えばねえ、僕の友人に、北海道の或る町の測候所にいるのがあるんですが、これが、人魂を見たって、言うんですよ。しかし、話をきくとその態度などは、貴方の冷静なのとは比べものにならないので、科学者の風上にもおけないと、思うのです。」

「彼が、人魂を見たというのは、先ずこうです。測候所には、戸外に百葉箱と言って、晴雨計や寒暖計などの入っている箱があるんですが、それを調べに行こうとして、見ると、その箱の上に人魂が乗っていた、と言うのです。これが第一回なのです。その時の人魂は、直径五六寸の青い火の塊で、尾をひいていたと言うのです。静止して尾をつけているのは、従来の火の玉説上、一寸新しいじゃありませんか。ところが、情けないのは、彼自身の方で、ガタガタ慄えてすくんでしまったのです。装置に近付いて、調査をしなければならないが、恐くて動けない。同僚を呼びに、逃げだしたのが、やっとのこと。腰を抜かさなか

ったのは、幸いでした。もう一度は、測候所の窓から、下の方の田圃を見ていた時、田圃の中の十文字になっている道の四つ角で、物凄く大きな人魂が、ぐるぐる回転しているのが、眼に映ったと言うのです。すさまじい勢いで、回転して、紅い中心に、黄色の火の子を辺りに振り散らしているのです。そう思って見ていると、突然その四つ角から突当りの方の道に沿って、恐ろしい勢いで、矢のように走り出し、二、三町もの間を一瞬に走り抜けて、アッと思う間に、流星のように消えてなくなってしまったと言うのです。そのときも、彼は、恐ろしさに震えながら、逃げ出すばかりの姿勢で、窓から覗っていたのです。本当に人魂を見たなんていう人は、千人に一人もありますかね。こういう千載一遇の好機に、二度も恵まれながら、恐ろしさに拒まれて、彼はやっとこれだけのことしきゃあ、見ていないのです。例えばですね。よくこういう際に起り易いのは、距離の錯覚ですが、その有無を確めるために、自分の位置を動かして見るといったような、そんな些細なことさえ試みていないのです。科学者として、少し情けないじゃあありませんか。そうですよ。貴方が、その変な音に、妖怪味を感じたりしたら、なかなかその音の真因は判りっこありませんでしたね。いや、勝手にそんなこと言っては失礼ですが。」

「一体に、仙台の夜には、妖怪味がない、と仰るんですか。これは同感ですねえ。僕も産まれは東北じゃあありません。ここへ来たばかりは、そう思いましたねえ。なんとなく、何時も夜空が、ボーと明るくて、下界にも、本当の闇の感じがないのですね。こんなところは、妖怪らしい怪談はないだろうと思ったくらいです。」

「恐ろしくはないけれども、この土地の淋しさは別ですな。いや、なにも、未だお独りの貴方に対して、安い同情めいたこと言うのではないのです。これは、僕自身も、さんざ経

験したことですから。」

「そうです。貴方の言う通りです。いえ決して、貴方のひがみではありません。その通りなんです。この土地では、我々外来者は、他所者という感じを、いやと言う程、嘗めさせられるのですね。ですが、この土地に悪気はあるのではありませんよ。特殊な人情なのです。それが判ってしまえば、何でもないのですが、馴れないうちは、全く不快な思いをしますね。」

「例えば、商売にしてみたところが、今貴方が仰った、初めはいいが、段々愛想がなくなって来て、悪いものを売りつけるという商法。それが正にあるのですね。東京なら、米屋ぐらいのものですね。馴れた顧客先に、悪い品を持ち込んだりするのは。ところが、この土地では。米、味噌、醤油、薪炭、魚、八百物、殆どそれなのです。ところが、よく見るとこれが面白いのです。一軒の店から取り付けると、段々悪くなるので、勢い一月か二月すると、別の店から取る。そこから一、二カ月するとまた他の店という風に、出入りが段々変わって行く。三、四軒回ると忘れたような頃に、前の店から新しい出入を始める。こういった具合に、八百屋なら八百屋で、魚屋なら魚屋で、それぞれ数軒の回り持ちが出来るわけなのです。つまり、この数軒が、利潤を、均等に得ることになるわけですね。言わば商人自身のため相互扶助的な商法で、客のための商法ではないのですね。段々悪いものを持って来ると言えば、一寸見れば利己的ですが、この回り持ち的システムから言えば、利己的なうちにも、限界を作って満足しているという、欲の浅い、目出度さがあるのです。なに、土地の人は、何とも思ってやあしません。その点、客として、こういう商法を理解を持っているのですね。腹を立てるのは、この商法の意味を知らない他所者だけですよ。」

「女もその例ですかな。僕の女房なんかも、それですが、はじめは、随分親切な、そして、こんな事を言うのは変ですが、中々色気のある女だと思いましたよ。ちょっと体は大きいですがね。ここの百貨店に勤めていましてね。私はこんな女がいると、気がついてから、僅か四度目に、付文をしたんですよ。ところが、それから、一緒になるまでのあっけないこと。恋愛結婚なもんですか。仲人のない見合結婚みたいなもんでしたよ。一緒になって見れば、何故、付文などしたか、そのわけがどうしても思い出せないほどです。色気も張りも、まるでカフエーの看板の裏表みたいに違っているのですな。女房の奴は、今はもう、手紙を受け取った時の、あの新鮮な驚きなんて、薬にしたくてもなくなって、まるで、安心し切ってしまっているのか、色気の代りに、嫉妬威嚇増長っていったものがあるくらいなものですよ。ハハ、やきもちが色気なものですか。」

「どうも、女房ばかりは、八百屋や魚屋のようなわけには行かないのですが、なに、それだって、大したことはないのです。だんだん女房の口が小五月蠅くなって来ますとね、一喝くらわせるのです。図体はでかくても、女ですよ。感心に大人しくなりますよ。それで、その次の増長までに、暫く小康を保つ、と言ったところですね。」

「一般に、ここの人の性質がそうなんですよ。仙台人は使用人として使いにくいと、よく他所の土地で言われますが、使う方から親切にしてやると妙に増長するようなところがあるのですね。しかしですね。そういう性質は、相手が仙台人である限りは、之を悪意にとってはいけませんよ。底意はないのです。ただそういう風になるというだけのことで、叱れば、少なくとも、その当座だけは治るのです。叱責すれば、一層悪質になるような、悪たれたものじゃあないのです。欠点には違いないのですが、心配のない欠点なのです。ね

え。世の中には、純粋な、ひたむきな性質の恐ろしさってものがありますよ。それを知っている人には、こんな性質は、反って安心を与えるような欠点ですよ。ええ、勿論、雑草的な気分ではあります。しかし、雑草また可なり、ですね。仙台に永くいると、この欠点が、反って長所であることが、判って来ますね。エ？ハハハハこれが、僕の女房の惚気と言うわけですかな。」

「こう言う、何となく付き合いにくいところはあっても、根が決して悪気から出ているのではないのですから、深刻に人と争うなんてことは、余り聞かないのです。関西九州の人に見るような、個人的に、極度に張り合うと言った、対立感情は、余り持たないのですね。それでいて、不思議なことに、兵隊は強いのですよ。此処の師団ときたら。その点で有名です。何と言いますか、私闘ニ刼（きょう）ニシテ、公戦ニ勇、ですね。コレ王者之民也、ですか。政宗以来の、仙台藩の治政の然らしむるところですかね。政宗がえらい男だったわけですね。彼の言ったことが、藩祖公遺訓として、残っているんですが、こう言うのです。

一、　仁に過れば弱くなる
一、　義に過れば固くなる
一、　禮に過れば諂（へつらい）となる
一、　智に過れば嘘をつく
一、　信に過れば損をする

気長く心穏やかにして萬に倹約を用いて金を備うべし、倹約の仕方は不自由なるを忍ぶるにあり、此の世の客に来たと思えば何の苦もなし、朝夕の食事甘からずともほめて食うべし、元来客の身なれば、好嫌は申されまし、今日の行を送り、子孫兄

弟に能く挨拶をして娑婆のお暇申すが良し。

中庸の五条と仏教的信念の片鱗とを混ぜて、下世話の口にものるように、土臭くしたところが、面白いじゃありませんか。「信に過ぎれば損をする」なんてのは、正に傑作ですね。ここの小学校では、この藩祖公遺訓を講義するそうです。影響も大きいわけですね。」

「そうですね。この土地には、純粋やひたむきでないものの気楽さがありますね。その気楽さに浸みていると、我々他所者さえも、段々と仙台的になってくる。Acclimationですかね。土地を理解するためには、多少は、自ら進んで、これをする必要もまたあるでしょう。しかし仙台はなかなか土着誘惑力を持ってるんですね。東京あたりから来た他所者が、厭だ厭だと言いながら、この土地に落ち着いてしまうのが、案外多いようです。いや、それでいいのですよ。それでいいのですよ」。

× × ×

大家の義弟と、一杯やった後、その夜は十一時頃から、十時間ばかり、ぐっすりと眠った。レシーバーは次の日から当分かけない事にした。耳鳴りの音は、次の日から次第に小さくなって、二、三日すると、全然きこえなくなってしまった。

それから、大家の義弟と交際を始めて、彼が釣好きなところから、松島へ一緒に沙魚(はぜ)釣に行ったりした。しかし酒を呑まない彼は至極退屈な男で、しら面で付き合いするのは一寸骨が折れた。それが一度酒を呑むと、まるで人間が変わったように、多少ずるいが親切で人なつこくて、雄弁で諧謔と機智に富んで来る。こういう彼を考えると、今更のように酒というものは全く不思議なものだという気がする。

しかし、彼との交際が未だ満足な友人関係に達しないうちに、急に彼は東京へ転任する

ことになった。子供はないし、未だそれ程新世帯を脱し切った年頃でもないので、引越しの仕度は簡単に出来てしまったようであった。その折、私が通りがかりに彼の家を一寸覗き込むと、彼は出来上がった荷物の上に腰をかけていたが、酒も呑んでいないのに、珍しくニコニコして立ち上がって来て私に挨拶した。東京転任と言えば、多分栄転だろう。しかし私はその馬鹿に上機嫌な顔付を見て、確かにそればかりではない、あんなことを言いながら彼も矢張りこの土地にアクリマシオンをしたくないのが本心だな、と見てとったのである。

翌日、私は近所の人に交じって二人を送りに停車場へ行った。大きな体の細君と小さな体の彼とは、まるで新婚旅行のように晴々と楽しそうな顔を上野行きの汽車の窓に並べて発って行った。

【新風土（小山書店）　昭和十四年十一月号】

95頁　蟄居の穴窖……引き籠るための巣穴
98頁　武者母衣　……武士が鎧の上に背負って矢を防いだもの
114頁　「私闘ニ刧ニシテ、公戦ニ勇」　……史記商君変法の一節
115頁　Acclimation……環境順応